

認知的侵入可能性と認識的影響

The Cognitive Penetrability and Epistemic Influence

原田夏樹

Abstract

Is it possible that what one believes or thinks influences what one sees? If so, then this relation is called the cognitive penetration of perception. In this paper, I'll do two things. First, I'll introduce some problems with the cognitive penetrability—an epistemic problem and a cognitive scientific one—and suggest there's confusion in the discussion of the cognitive penetration. Second, I'll refer to the cases in which perceptual experiences can't provide enough justification for believing such-and-such because of cognitive penetration. This is the case of the epistemic downgrade. Then, I'll argue that the cognitive penetration does *not* always lead to the epistemic downgrade.

(1) 研究テーマ

認知的侵入可能性 (cognitive penetrability) とは、知覚以外の要素 (信念, 欲求, 期待などの先行する心的状態) が知覚経験の内容に対して影響を及ぼすことである。認知的に侵入可能であるならば、「同一の外的条件のもとで同一の外的刺激に対して、二つの主体が異なる内容の視覚経験を持つこと」が可能である。一般に、信念や思考が知覚によって影響を与えられるのは当然のことであると考えられているが、信念などの心的状態が知覚に影響を与えることはありうるだろうか？本稿は認知的侵入可能性をめぐる問題の概観と、そこから生じる認識論的問題について論じることを目的としている。

そもそも、なぜ認知的侵入が問題となるのだろうか。この問題は、知覚の哲学において近年盛り上がりを見せており、それを認めるか否かによっていくつもの重大な帰結が導かれるⁱ。

①例えば、観察の理論負荷性。「知覚観察はテストされている理論に対して中立的であり、その理論を支持したり退けたりする証拠となるものである」という経験主義者たちの想定に対して、ハンソンらは「知覚は我々の理解や知識を纏って成立しているのであって、純粹無垢の感覚与件などは存在しない」と主張した (Hanson 1958)。観察が、先行する心的状態によって影響されうるというのなら、当の観察に基づいて合理的に理論を決定することが困

難になってしまうのではないだろうか？

②正当化の問題．これは①を認識論一般のものとして広く捉え直したものである．ここで重要なのが、「知覚はそれに基づく信念を正当化する」とか「知覚は知識を与える」といった考え方である．ある主体が視覚経験を持つとき、ふつうはその経験に基づいて信念ないし判断が形成される．知覚経験は信念を認識的に正当化するのである．そうして形成された信念が正しいければ、主体は世界についての何かしらの知識を持つことになる．知識というものは究極的には知覚経験に基づいているのである．こうした知覚に基づく信念形成ルートは、信念同士のそれと類比的に考えることが可能である．なぜか？それは、知覚経験がそれ自体で意味を持ち、信念や文に真偽を問えるのと同様、正確であったり不正確であったりする状態として分析されるようになったことと関係している．現在の知覚の哲学者たちの多くが志向説を採っているが、これは端的に言えば「知覚経験は表象的・志向的内容をもつ」というものである．知覚経験は、世界をあるあり方をしたものとして表象し、表象される世界のあり方（表象内容）の観点から特徴付けられるのである（源河2017a）．知覚経験が外界の出来事について正しいとか正しくないとか言えるのなら、自然と次のような考えが浮かぶだろう．すなわち、ほかの信念や推論過程を経由することなく、知覚経験は外界についての信念の正当化に寄与するというものである．

しかし、背景的信念等によって知覚が影響を及ぼされうるというならば、知覚の持つ認識的な役割（正当化を与える、信念や知識の理由となる）は脅かされるだろう．認知的侵入可能性を認めてしまうと、認識的な有害性が生じることになってしまうのである．このことは、いわゆる現象的保守主義に困難を突きつける．この立場によれば、知覚経験を持つことはそれだけでしかじかのことを信じるための一応の（*prima facie*）正当化を与える、と考えられているからだ．

③心のモジュール説との衝突．これはフォーダーによって提唱されたものであるが、心的モジュールとは、特定の領野に特化してすばやく計算を進めるシステムのことである．フォーダーやピリシンらは心をコンピュータとして捉えようという認知観のもと、心というコンピュータがどんな風にして情報処理を行うのかを明らかにしようとした．彼らによれば初期段階の計算プロセスを行うところのモジュールは、認知的に侵入不可能である．つまり、知覚システムがモジュールであるならば、認知的に侵入不可能であることになる．

(2) 研究の背景・先行研究

そもそも「認知的侵入可能性」という術語を初めて用いたとされているのが、古典的計算主義者のピリシンであった。認知的侵入可能性の問題の背景には、古典的計算主義の枠組みがあったのである。古典的計算主義によれば、心は形式システム、つまり「離散的なアイテムをその形式的な性質に言及した規則に従って操作することで計算を進めるシステム」であると考えられた（戸田山 2004:30）。代表的な Fodor (1983) の心のモジュール説を参照しよう。

フォーダーがモジュールとして想定していたのはあくまで視覚・聴覚に関わる入力系（周辺系）であって、推論・解釈に関する中央系ではない。心的モジュールの特徴のうち、認知的侵入可能性を考えるうえで重要なのが「情報遮断性」である。前述の通り、知覚プロセスであるモジュールが情報的に遮断されているということは認知的に侵入不可能だということである。このことの根拠としてよく挙げられるのが、ミュラー＝リヤー錯視だ。矢羽の向きが異なる二直線の長さが等しいと頭ではわかっていながら、依然として両者の長さは異なるものとして知覚されるⁱⁱ。

知覚システムがモジュールであるというフォーダーの仮説は、ピリシンのいう認知的侵入不可能性と密接に関わっている。というのも、彼はフォーダーのいうモジュールの情報遮断性という概念を、侵入不可能である視覚プロセスを説明する際に利用しているからである。また、初期からピリシンが試みていたのは、知覚プロセスを思考から分離することであった。さらにピリシンは、視覚プロセスを初期と後期に分け、認知的に侵入可能なのは後者であり、視覚プロセスの初期段階は侵入不可能だとした。彼のいう初期視覚（early vision）とは、刺激の開始から観察者に中心化された（viewer-centered）対象の表象を構築するに至るまでの一連の視覚プロセスのことである。これに対して認知的に侵入されうる後期視覚（late vision）は、認識や同定を含む。一般に対象認識というものは、視覚的な情報と概念的情報及び長期記憶との相互作用によって担保されると考えられている。この直観を保持するためにピリシンは初期視覚という区分を設け、そこから認識的なプロセスを排除したのである（Raftopoulos&Zeimbekis 2015）。

一方で近年の知覚の哲学においては、認知的侵入可能性を支持する論考が数多く発表されている。以下では、経験科学的な実験データや哲学的な思考実験に基づく考察を紹介するが、そのいずれもが、色や形などの（初期視覚の圏内にあると思われる）低次の性質でさえ侵入されうることを示唆している。

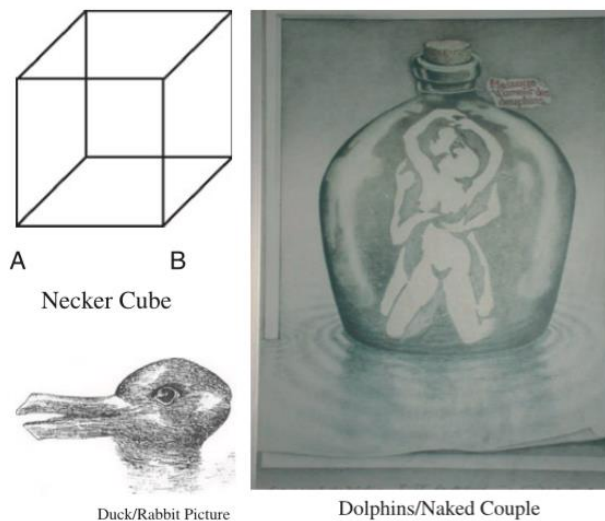
I. 「バナナは黄色である」という信念を予め持っていたために、モニター

上のバナナの色を灰色に調整するという課題に対して、被験者は青みがかかったように調整してしまう (Hansen *et al.* 2006). これは、バナナについての記憶が色の視覚経験に侵入した例として考えることができる。

II. 同じ色の顔だが、その顔の各パーツが白人に典型的な特徴を持つか、黒人に典型的な特徴を持つかによって異なった色に見える。つまり、白人の場合はより明るく、黒人の場合はより暗く見える (Levin&Banaji 2006). これは、人種的なバイアスが色の明るさの視覚経験に侵入した例と考えられる。

III. Siegel (2006) において考案された有名な思考実験で、以下のようなものがある。これまで松を見たことがないが、様々な種類の木々の中から松だけを選び抜く仕事に就き、教えてもらっているうちに松を見分ける能力が向上する。こうした能力を獲得する前と後での視覚経験においては、現象的な差異が存する。これは、松に関する知識や信念が視覚経験に侵入したケースと考えることができるだろう。

IV. これらの多義図形は、与えられている低次の性質（色、形、サイズ、位置）には変化が生じていないにもかかわらず、違った内容の視覚経験を持つことが可能である (Macpherson 2012). 内容が異なるということは現象的性格も異なるということなので、両者はまったく異なる知覚経験だということになる iii. これらは、何を見ようとするかという意図や、見えなかった相を教えてもらうことによって得た知識が、視覚経験に侵入していると考えられるだろう。



以上、認知的侵入が起こっているように思われる四つの事例を紹介したが、実際にはどれも、認知的侵入可能性を支持する根拠としては決め手を欠い

Macpherson (2012) より抜粋

ている。例えばIVに対しては即座に異論を唱えられるだろう。すなわち、ここに現れている差異は現象的性格におけるそれではなくて、ただたんに判断や解釈の操作が異なるだけだ、というものである。例えば、アヒル-ウサギの二重アスペクト像については、アヒルである、ウサギであるといった二通りの解釈があるだけで、現象的性格は同一であると考えられる。

しかしながら、再反論も可能である。上記のような解釈モデルでは、ウサギ性は色や形など低次の性質に基づき、推論過程を経てなされた判断だと考えられている。しかし「ウサギである」という種性質も知覚されうるとした

場合はどうだろうか？それは非推論的に得られた知覚内容に含まれると
言うことができる。

Macpherson (2012) が指摘するように、直観的には、Ⅲに対しては「色や形といった低次の性質を注意深く見て推論・解釈する能力が向上した」という説明を、Ⅳに対しては現象的差異による説明を採るのが好ましく思われる。いずれにせよ重要なのは、両者とも認知的侵入によるものではないと考えることが可能であるということだ。多義図形の視覚経験における現象的差異も、認知的侵入というよりは、注意の向けかえという観点からの説明がもっともらしい。

以上のことから、認知的侵入をはっきりと定義づけるのは困難である。どこまでが認知的侵入なのか、どの事例において認知的侵入があると言えるのかは、はっきり言ってケースバイケースであるというのが実情だ。色経験におけるそれのように、明らかに認知的侵入があると言いたくなる事例もある一方で、学習による能力獲得という説明の方が適切であるような事例もある。また Machery (2015) では、認知的侵入可能性をめぐる議論が行き詰まっているということさえ指摘されている。西村 (2017) ではこのことを考慮しつつ、大別して意味論的定義と因果論的定義が挙げられているが、論者の間での「認知的侵入可能性」の定義は依然としてまちまちである iv。

(3) 筆者の主張

前節で見たように、認知的侵入可能性をめぐる議論は錯綜している。しかしながら、知覚経験が歪んでしまった場合に認識論的に何が起こるかを考えること自体は、哲学的に大変有意義なことである。本節では、認知的侵入を認識論的な問題として捉え直し、それがどんな認識的影響をもたらすのかについて扱う。すなわち、認知的侵入を「先行する心理状態によって知覚経験の内容が影響される場合」であると考えて議論を進めよう。この際、現象的性格も同様に変化しているかどうかはオープンにしておく。

ここで再び、冒頭の②で挙げた正当化の問題に戻ろう。通常、「正当化されている (いない)」とか「合理的である (不合理である)」といったことは信念について言われることである。知覚経験そのものについては、合理的だとか、信念と正当化関係に立つとは考えられてこなかった。しかし、認知的侵入 (のようなもの) を認め、知覚経験そのものが歪められてしまうことがありうるとするならばどうだろうか？知覚経験が信念形成に対して何か認識的な悪さをしている場合があるのではないだろうか？そのような場合、知覚経験も合理性という点で評価可能になる道も開けてくる。例えば Siegel (2017) では、知覚経験が、先行する心理状態によって不合理なものになってしまう

事例が挙げられている。

i. 怒りの思考実験. ジルはジャックが自分に対して怒っているのではないかと恐れている。そして実際にジャックに会った時、彼女の恐れが、ジャックが怒っているように見える視覚経験を引き起こした。ここでジルは、「ジャックは自分に対して怒っている」という信念から出発し、それによって影響を受けた知覚経験を持ち、最終的にその信念を強化するに至る。だが、実際にはジャックは怒っていないのだとしたらどうだろうか。このケースでは先行する心理状態（ジャックに対する恐れ）が、知覚経験を不合理にしていると言えるだろう。

ii. 前成説. 精細胞の中に胚が含まれているという仮説を支持する人が顕微鏡を使って精細胞を見たら、細胞の中に胚があると報告した。前成説についての信念が、それを支持するような視覚経験を引き起こしたのである。

iii. ペンチと銃. 被験者に対象が提示され、それが銃であった場合には「gun」のボタンを押し、ペンチの場合には「pliers」を押し。対象を見る前に、白人か黒人の男性の写真が見せられる。白人よりも黒人を提示された場合の方がペンチを銃と誤認しやすい。「黒人は危険である」という偏見が、銃の経験を引き起こしたと考えられる。

シーゲルは上記のような経験を「乗っ取られた経験 (hijacked experience)」と呼ぶが、彼女によれば、乗っ取られた経験を持つ主体がそれに基づいて信念を増強するのは不合理である。というのは、先行する心理状態によって悪影響を受けた乗っ取られ経験そのものが不合理だからである。繰り返すが、このことは「誤った信念から後続の誤った信念が形成されること」と類比的に考えることができるのである。シーゲルはこのように、経験が信念に対して与える正当化が弱められてしまうことを「認知的格下げ (epistemic downgrade)」と呼んでいる。

ここですぐに考えられる疑問が、「認知的侵入はつねに格下げを導くのか」というものであろう。これについては否であると主張したい。ここで注意されたいのが、(1)で挙げた諸問題に加え、認知的侵入可能性の問題は知覚の許容内容をめぐる問題と密接に関わっているということだ。どういうことか。

知覚経験も内容を持つという志向説を採ることによって、「知覚内容にはどれだけのものが含まれるのか」ということを問うことが可能となった。IIIで示唆されたように、知覚内容には、色や形といった低次の性質だけでなく、種性質や人格の同一性、他者の心的状態などの高次の性質も含まれるのではないだろうか？ ついで即座に生じてくるのが、我々が想定していた「認知的に侵入されたもの」は高次の性質ではないかという問題である。高次性質

が知覚されうるならば（そして認知的侵入によって高次性質が知覚可能になる場合があるのだとすれば），認知的侵入は必ずしも格下げを導くのではないと主張できるだろう。「つまり，認知的侵入によって，知覚的に正当化されうる信念の種類が増えるのである」（源河 2017b:175）。

(4) 今後の展望

今後の展望としては，三つが考えられる。まず認知的侵入の範囲について。前述のように，認知的侵入可能性を認めるかどうかは優れて経験的な側面を持つ。それゆえ，科学によって得られた実験データをその都度吟味していくという作業が哲学には求められるだろう。第二に，前節のように，認知的侵入可能性は高次性質の知覚可能性の問題とパラレルである。知覚による正当化を考えるとときには，知覚の許容内容に関する問題も考えることが必要であろう。そして最後に，認知的侵入は主に視覚経験におけるものとして考えられているが，筆者は「他の感覚モダリティの場合についてはどういった議論が可能か」ということにも関心がある。

i 以下の分類は Stokes (2013) を参照した。

ii ただし，情報遮断性の根拠としてこの錯視が本当に有力なのかについては議論の余地がある。というのは，未開の部族はミュラー＝リヤー錯視に引っかけられないという研究報告がいくつか挙げられているからである。このことは，むしろ我々が知覚学習によって獲得した何らかの能力によって錯視に引っかけられているという考えも可能であることを示唆しているのではないか。例えば，Robins (2017), Ch.2.1.を参照。

iii 現象的性格とは「その経験を持つことが主体にとってどのような感じか (what it is like)」という観点から特徴づけられる，意識に与えられる一人称的にアクセス可能な何かである。一般に現象的性格と知覚内容は対応関係にあると考えられている。

iv もちろん，身体運動や外的な刺激によって（例えば薬を投与されて幻覚を見ている等）主体の認知状態が変化することで内容に変化が生じる場合は認知的侵入ではないといった程度にはコンセンサスが得られている。

v なお Siegel (2017) では，基準値以上の正当化が与えられる「認識的格上げ (epistemic upgrade)」についても検討されている。

(5) 参考文献

- 源河亨, 2017a, 『知覚と判断の境界線: 「知覚の哲学」基本と応用』, 慶應義塾大学出版会.
- , 2017b, 「認知的侵入 (不) 可能性」, 『ワードマップ心の哲学』所収, 信原幸弘編, 新曜社.
- 戸田山和久, 2004, 「心は (どんな) コンピュータなのか」, 『シリーズ心の哲学 II ロボット篇』所収, 信原幸弘編, 勁草書房.
- 西村正秀, 2017, 「運動知覚の認知的侵入可能性」, 彦根論叢 412:52-67.
- Fodor, J. A, 1983, *The Modularity of Mind*, Cambridge, [『精神のモジュール形式--人工知能と心の哲学』伊藤笏康・信原幸弘訳, 産業図書, 1985.]
- Hansen, T, M. Olkkonen, S. Walter, & K. R. Gegenfurtner, 2006, “Memory modulates color appearance”, *Nature Neuroscience* 9:1367-8.
- Hanson, N. R, 1958, *Patterns of Discovery*, Cambridge. [『科学的発見のパターン』, 村上陽一郎訳, 講談社, 1986]
- Levin, D. & Banaji, M, 2006, ” Distortions in the Perceived Lightness of Faces: The Role of Race Categories”, *Journal of Experimental Psychology: General*, 135:501-512.
- Machery, E, 2015, ” Cognitive Penetrability : A no-progress report”, In Zeimbekis & Raftopoulos (2015).
- Macpherson, F, 2012, ” Cognitive penetration of colour experience”, *Philosophy and Phenomenological Research* 84:24-62.
- Pylyshyn, Z, 1980, ” Computation and Cognition : Issues in the Foundations of Cognitive Science”. *Behavioral and Brain Sciences* 3:111-32.
- Robins, P, 2017, ” Modularity of Mind”, *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (<https://plato.stanford.edu/entries/modularity-mind/>).
- Siegel, S, 2006, “Which Properties are Represented in Perception?”, *Perceptual Experience*. In T. Szabo Gendler & J. Hawthorne (eds.), Oxford, 481-503.
- , 2017, *The Rationality of Perception*, Oxford.
- Stokes, D, 2013, Cognitive penetrability of perception, *Philosophy Compass* 817:646-63.
- Zeimbekis, J. & Raftopoulos, A. (eds.), 2015, *The Cognitive Penetrability of Perception: New Philosophical Perspectives*, Oxford.